

個体発生・系統発生・精神分析：エルンスト・ヘッケルの思想（2）

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5386>

出版情報：言語文化論究. 14, pp.19-29, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



個体発生・系統発生・精神分析

— エルンスト・ヘッケルの思想(2) —

福元圭太

0. はじめに

1-4. 講演「総合科学との関係における現代進化論について」

1-4-1. 「反復説」とその影響 — 特にフロイトの精神分析との関連で

0. はじめに

前稿「一元論の射程 — エルンスト・ヘッケルの思想(1) — 」¹⁾ではエルンスト・ヘッケルの生涯と業績、ならびにヘッケル思想の母胎であるチャールズ・ダーウィンの仕事を瞥見した後に、ヘッケルの1863年の講演「ダーウィンの進化学説について」を、特にゲーテの形態論との関連で読み込んだ。本稿はそれに続いて、ヘッケルの講演「総合科学との関係における現代進化論について」を取り上げるが、そこで問題となっている「個体発生は系統発生を要約的に反復する」といういわゆる「反復説」が、フロイトの精神分析に与えた影響を特に論じてみたい。

なお前稿では講演「ダーウィンの進化学説について」の原典にあたることができず、八杉龍一氏による岩波文庫²⁾の訳文を全面的に使用させていただいた。しかし今回は、Webcatで検索するかぎり日本では東京大学の医学部図書館と、同じく東京大学の教養学部図書館のみが所蔵する、ヘッケルのこれらの講演が所収された1, 2分冊揃いの原典を複写することができた。貴重な蔵書の複写に便宜をおはかりいただいた、東京大学教養学部8号館図書館のスタッフにお礼を申しあげる³⁾。

1-4. ⁴⁾ 講演「総合科学との関係における現代進化論について」

1877年9月18日、第50回ドイツ自然科学者・医学会議での講演「総合科学との関係における現代進化論について(Ueber die heutige Entwicklungslehre im Verhältnisse zur Gesamtwissenschaft [sic!])」⁵⁾は1859年にダーウィンの『種の起源』が出版されてからすでに18年が経過し、進化論がほとんど一般化したころに行われたものである。この比較的短い講演にはヘッケルの学問に関する考え方や世界観が集約的にあらわれており、ヘッケルの思想を抽出する好個の材料となっている。

ヘッケルは、進化論はすでに市民権を完全に得ており、比較解剖学や胚発生学、動植物の分類学はもはや進化論なしには立ち行かないという見解を述べる。また古生物学や生態学も進化論によってのみ説明可能であると言う。例えば見えない目、飛べない羽、動かない筋肉といった「奇妙な痕跡器官の存在 (die Existenz der merkwürdigen rudimentären

Organe)』⁶⁾は、神と自然とを分離する二元論哲学において支配的な「目的論 (Teleologie ないし Zweckmässigkeitslehre [sic!])」⁷⁾では説明がつかない、「痕跡器官」こそ機械的な諸原因が偶然そこに生ぜしめた一元論的進化論の明白な証拠である、というわけだ。わかりやすくパラフレーズすれば、神が自然を合目的的に創造したとすれば、このような痕跡器官は存在し得ない、したがって神と自然の二元があるのではなく、神=自然という一元論が正しいのだ、ということになる。

ヘッケルのこのような生物の「系統」としての一元論的自然発達史は、「個体」のダイナミズムとも結び付けられる。前稿でもふれた「生物発生の基本法則 (das biogenetische Grundgesetz)」がそれである。胚がごく短い期間に経過する形態変化は、その生物の祖先たちが長大な年月の間に経過したのに該当する形態変化の、簡略化され短縮された反復である、というこの法則をヘッケルの術語を用いて定式化すれば「個体発生 (Ontogenese または Ontogenesis) は系統発生 (Phylogenese または Phylogenesis) の要約的反復 (ein Auszug) である」となろう。ニワトリの卵を孵卵器に入れてからヒナが孵化するまでの21日間をつぶさに観察すれば、卵が単細胞のアメーバからガストレア (腸祖動物)、蠕虫類、無頭類 (ナメクジウオ)、魚類、両生類、爬虫類を経て鳥類へ至る気の遠くなるような系統発生の歴史をたった3週間で反復しているのがわかるのだ。ヘッケルはニワトリを例に引いたが、それはかえって人間だけが神の特別な被造物ではないことを強く示唆するためのレトリックにすぎない。事実、講演が進むにつれ問題となるのは人間である。

蓋し進化論が科学全般、ひいては世界観に及ぼした甚大な影響とはすなわち、それが人間にも適用されたということに他ならない。エンゲルス風に言えば「猿が人間になる」ことが科学的に基礎づけられたのである。人間をも含めた発生の系統樹をヘッケルは比較言語学の研究成果である言語発生の系統樹になぞらえている⁸⁾。印欧祖語からギリシア、ラテン語等を経てインド・ヨーロッパに現存する言語のほとんどが発生してきたというあの系統樹のアナロジーによって、進化の系統樹は明確なイメージを与えられるのである。

進化論が我々を導く先は、ヘッケルによれば「世界観の統一 (すなわち一元論)」⁹⁾である。先ほど「痕跡器官」について述べたところで触れたように神と自然の二元があるのではなく、「神=自然という一元論」を取れば、たしかにある面では唯心論と唯物論のどちらか一方に傾くことなく、二元論的世界把握において存在していた諸対立は解消され得る。また科学的データを基本的には不要とする従来¹⁰⁾の形而上学的哲学などの精神科学と、科学的データのみを必要とする従来¹¹⁾の自然科学を統合する可能性が出てくる。これがヘッケルの言うところの「総合科学 (Gesamtwissenschaft)」に他ならない。唯心論でも唯物論でもない科学、いやそのどちらでもある科学、精神科学と自然科学の総合された統一科学がヘッケルの「総合科学」の謂であり、そのような科学の樹立こそがヘッケルの目指したものであった。

このような学問論との関係で興味深いのは、ヘッケルがこの文脈で、近年某国においてもかまびすしい「教育改革」に言及することだ。科学像の変革のためには青少年の教育が重要であると考えるヘッケルは「進化論は学校においても最も重要な教材としてその正当な影響力を及ぼすものとされねばなりません」¹⁰⁾と言う。高等教育機関、すなわちギムナジウム等では二つの志向が対立していた。一方は伝統的な「古典的、歴史的-哲学的」教育、他方は「精密な、数学的-物理学的」教育である¹¹⁾。ヘッケルの持論は、進化論に裏

打ちされた一元論が古典科学と精密科学、精神科学と自然科学の紐帯として機能するというものであった。もしそうであるなら統一的な「総合科学」すなわち一元論は、当時の教育に内在するこれら二つの対立する志向を仲介し、和解させるであろうという論理が導き出せる。

また、進化論は必然的にキリスト教の教会信仰の問題に行き当たる。ヘッケルはもちろんこれにも言及している。「すべての人間の胸には教会への帰依とは別に真の自然宗教(Naturreligion)の萌芽が息づいている」¹²⁾。しかしその「自然宗教」の内実は、今日から考えればほとんど陳腐さに境を接していると言わざるを得ない。真の自然宗教の「最高の掟は、おのずと生じるエゴイズムを同胞の利益のために、また自分がその一員である人間社会の福祉のために抑制する愛」¹³⁾であると言うのだ。この「自然の道德律(natürliche[s] Sittengesetz)」はどんな教会宗教よりもはるかに古い、なぜならそれは「動物の社会本能から進化してきた」¹⁴⁾のだから。ヘッケルが思い浮かべているのは驚くべきことに「アリ、ハチその他の集合生活をする動物」¹⁵⁾である。これらいわゆる社会的動物の本能こそが人間にも通用する「道德の源泉(die Urquellen der Moral)」¹⁶⁾であるというのだが、これはいささか根拠が薄い。ショーペンハウアーの次の警句を想起するまでもない。いわく、「道德を説くのは易しいが、道德を根拠づけるのは難しい。」(Moral predigen ist leicht, Moral begründen schwer.)¹⁷⁾

以上ヘッケルの講演から特に「個体発生と系統発生」に関する議論、一元論に基づく統一的「総合科学」の思想、精神科学と自然科学の結合による青少年教育の改革への提言、ヘッケル流の「自然宗教」の概要を見た。「個体発生と系統発生」という問題から私たちは次に別の大きなテーマ、すなわちヘッケルがフロイトの精神分析に与えた影響というテーマへ移行しなくてはならない。また青少年の教育改革と「自然宗教」——それはとりもなおさずキリスト教からの離反である——に関する発言は、ヘッケルが後のドイツ青年運動の指導者たちに与えた影響を考察する契機となろう。

1-4-1. 「反復説」とその影響 — 特にフロイトの精神分析との関連で

この節では、前節で取り上げた「生物発生の基本法則」ないし「反復説」(個体発生は系統発生の要約的反復である)が生物学以外の領域に与えた影響を、特にフロイトの精神分析との関連を中心に論じる。なお、この節はハーバード大学地質学講座の俊秀にしてユニークなエッセイストでもある¹⁸⁾スティーブン・ジェイ・グールド(Stephen Jay Gould)の「エンサイクロペディア的大著」¹⁹⁾かつ生物学の専門書として「もはや準古典的な存在となっている」²⁰⁾『個体発生と系統発生』²¹⁾の特に第1部第5章「滲透する影響」を参照した。

グールドが「反復説」の影響範囲として挙げているのは以下の5つの領域である。すなわち(i)犯罪人類学、(ii)人種差別主義、(iii)子供の発達に関する議論、(iv)初等教育、そして(v)としてフロイトの精神分析である。もちろんこれらの領域以外にも「反復説」は滲透しており、文学作品や文芸評論²²⁾、さらにはあのスポック博士の『育児書』にまで影響を跡づけることができるが、これら「反復説」の影響が認められる箇所引用のコレクションは、その気になればきわめて膨大な数へとふくらませることができよう。われわ

れは上記の (i) から (iv) まではグールドの華麗な議論の要約に若干のコメントを付すにとどめ、フロイトについては、少し詳しく取り上げることにしたい。

(i) 犯罪人類学は端的に言えば、犯罪者になる人間は生物学的にもともと決まっているという乱暴な決定論で、今日の常識からは著しく逸脱しているが、かつては大真面目に議論されたもので、19世紀後半の最も重要な科学的・社会的運動となった。1876年のチェーザレ・ロンブローゾの著作『犯罪人論』をもってイタリアで開始されたこの「学問」は犯罪人を人類の系統発生の時系列を遡及して、類人猿の先祖返りと位置づける。すなわち生まれつきの犯罪者は野蛮人の段階にある、彼らは系統発生 of 階梯を上昇せず、過去の非文明的泥濘に首までどっぷりつかったままだ、というわけだ。このような極端な生物学的決定論がヒトラーの優生学の根拠となるのはまた後の話である。犯罪人類学が日本にも到達したことは、今でもまだ古書店の棚でかなりの数、埃をかぶったまま置かれている『近代犯罪科学全集』全17巻(昭和5年、1930年、武俠社)をめくってみればすぐにわかる。相当数が今だに古書店に出まわること考えれば、当時は大ベストセラーであったと考えてよい。

(ii) 人種差別主義は、(i) の「犯罪者」を特定の「人種」に置き替えれば、論理は同じである。「高等な」とはすなわち「自分がそこに属する」人種から見れば、特定の人種は生得的に「下等」である、つまり系統発生 of 階梯の下位にとどまっていると決めつけられる。そのような主張に与する科学者に政治的意図があったかどうかは別にして、猖獗をきわめつつあった帝国主義にとっては、この似非科学はまさに渡りに船であった。ただし実際のところは、1920年代から30年代にかけて、「反復説」はすでに論駁されつつあった。「反復説」とは全く方向を逆転させた「幼形進化(ネオテニー)」という説が台頭してきたのだ。「体細胞的な発育の遅滞によって生ずる幼形進化」²³⁾と定義できるネオテニーは特にヒトにおいて顕著である。進化が進めば進むほどヒトは霊長類の幼若段階に似てくるというのだ。無毛で弱々しいヒトは野性の霊長類からすれば赤ん坊にすぎない。つまりこれまで「下等」とされてきた人種の子供は「高等」な人種の成人段階に相当することになり、ゆえに「下等」な人種の成人は「高等」な人種の成人に優ることになってしまう。このネオテニー説がほとんど無視または黙殺されたことは、帝国主義の拡大や黒人に対する奴隷制度の根強い残滓を見ればすぐに判ることだが、それが最も極端な形で現れたのはまたもやヒトラーにおいてであった。ユダヤ人の抹殺計画がそれである。なおヘッケルの思想とナチズムの関係については稿を改めて論じる予定である。

(iii) 「反復説」にしたがえば、子供の発達においては、同じ種、すなわちヒトの系統発生の初期段階が反復されているのであるから、子供の知能の発達を観察すれば人類の知能の発達史が再構成できるかもしれない、と考えるのは論理的である。事実アメリカの著名な児童発達の研究者、スタンリー・ホールやフランスの教育心理学者ジェン・ピアジェは子供の知能の発達に大いなる関心を抱いた。特に後者は、ヘッケル流の「反復説」の絶頂期に古生物学を学び、ジュラ期の腹足類に関する学位論文をものしたほどの人である。ピアジェが先史時代の人類が何をどのように考えたのかという歴史を再構成しようとする際、それが子供の研究によってのみ可能であると考えたのも不思議ではない。

(iv) 初等教育が子供の発達にとってきわめて重要であるという主張は、現在においても通念となっている。ハーバート・スペンサーなどは、子供は人類が学んだ順序で知識を

習得していくべきであると考え、教育そのものが文明の諸段階の要約的反复でなくてはならないと主張した。またヘッケルのはるか以前、18世紀から19世紀にかけて活躍したドイツ語圏の教育改革者たち、すなわちベスタロッチ、フレーベル、ヘルバルトのいずれもが、前ヘッケル流のあいまいな「反复説」の支持者であったことは、のちのドイツの教育界の動向を占う上で興味深い。事実ヘッケルが「反复説」を強力に主張して以来、ドイツの初等教育の分野ではその伝統に鑑み、「反复説」が初等教育カリキュラムの基本理念を形成することとなった。ヘルバルトの死後に結成されたために、ヘルバルト自身は全くあずかり知らぬ、いわゆる「ヘルバルト学派」の教育学者たちの発言力は絶大であった。というのも、1870年代、80年代にドイツの大学にはたった二つしか教育学の講座がなく（イエーナ大学とライプツィヒ大学）、そのどちらもが「ヘルバルト学派」で占められていたからだ。ライプツィヒのトゥイスコン・ツィラー（1817-1883）は、約言すれば、「子供がまだ野蛮人の段階にある間は、洗練されていない、粗野で素朴で野蛮なものから始めて、順次文明の階梯を上昇するような書物を読ませるべきである」という方針に則って、ドイツ国民学校8年間のコアとなる教材を以下のように段階的に選定した。

- 1年生：叙事的な民間伝承からとった物語（グリム童話）
- 2年生：ロビンソン・クルーソー（ドイツに舞台を移したもの）
- 3年生：旧訳聖書の家父長時代
- 4年生：イスラエル士師記
- 5年生：イスラエル王朝史
- 6年生：キリスト伝
- 7年生：十二使徒伝
- 8年生：宗教改革史²⁴⁾

なるほど非常に興味深い配列ではある。しかしこのような「反复説」モデルに基づいたカリキュラムは歴史、文学また道徳教育には適合する面があったかもしれないが、グールドも指摘するように、自然科学科目では必然的にジレンマに陥らざるを得ない。「科学史を忠実にたどり、現代科学の前に錬金術を、地動説の前に天動説を大まじめで教えることなどできないから」²⁵⁾である。かくして「反复説」モデルに基づいた初等教育カリキュラムは20世紀まで存続することはできなかった。

(v) さて最後に、われわれが最も興味を引かれるフロイトの精神分析に与えた「反复説」の影響を考察してみよう。フロイトがヘッケルの学説を大幅に採用した理由としてグールドは次の二つを挙げている。すなわちフロイトがヘッケルの学説の全盛時代に生物学者としての訓練を受けていること（これは先のジャン・ピアジェについても言えることであった）、ならびにフロイトが生涯にわたって熱心なラマルク主義者であった、つまり獲得された形質は遺伝すると考えていたことの二つである。後者にはやや説明が必要かもしれない。

ヘッケルも「獲得形質の遺伝」に関しては全面的にラマルクを採用したラマルク主義者であった。そもそもヘッケルの進化論はラマルクが『動物哲学』で主張した系統説・プラス・ゲーテの形態学²⁶⁾という独特のものであったのだ。ラマルクの説を概括すれば、(a) 環境の変化に応じて動物には何らかの変化を起こす必要が生じる、(b) これら新しい必要は動物に新しい習性を与え、古い習性は捨て去られる、(c) そしてこの新しい必要と習性

が新しい器官を作り、かつそれを発達させる、(d) この器官の発達または消滅はその使用、不使用によって決まる、(e) こうして獲得されたり消滅したりした形質は遺伝によってその子孫に伝えられる²⁷⁾、というものである。特に (e) は1883年に胚芽質こそが唯一遺伝形質の「運送屋」であるという²⁸⁾、今日のDNA説の萌芽的見解を述べたワイズマンによって否定されたが、ヘッケルはラマルク説を捨てなかった。ワイズマンの「最大の両批評家、スペンサーとヘッケルとが彼の説の余り賛成せざることは固より明白で、若しこれを採用せんか、彼等が畢生の事業たる多くの大著述を書き直さねばならぬことになる」²⁹⁾。

話がやや横道にそれたが、フロイトはヘッケルの特に「反復説」を生涯支持し、「個体発生は、系統発生のごく最近の経験によって変更されていない限りは、系統発生の反復とみなせるかもしれない。系統発生の傾向が個体発生の過程の背後でもはたらいているのが見て取れる (Die Ontogenese kann als eine Wiederholung der Phylogenese angesehen werden, soweit diese nicht ein rezenteres Erleben abgeändert wird. Die phylogenetische Anlage macht sich hinter dem ontogenetischen Vorgang bemerkbar.)」³⁰⁾といった発言を繰り返している。例えばフロイトは「性欲論三編」において、幼児の口唇性欲と肛門性欲を、視覚が発達することにより嗅覚と味覚への依存を強める前の四足獣の祖先と結びつけたが、これは口唇期と肛門期が初期の動物の生活形態に由来するという仮定に基づくものに他ならない³¹⁾。

また神経症の起源を幼児期のごく初期に受けた強い印象に求める精神分析の根本も、ラマルク主義と系統発生の思想がなければ成立し得ない。「発達の初期の段階はいかなる意味でも保存されてはいない。それらを素材として生まれた後期の発達段階の中に吸収されてしまっているのだ。大人の中に胎児が見つかることはありえない [...] 唯一心理の領域においてのみ初期のあらゆる段階が最終的な形態と一緒に存続するということが可能なのである [...] (Die früheren Phasen der Entwicklung sind in keinem Sinn mehr erhalten, sie sind in den späteren, zu denen sie den Stoff geliefert haben, aufgegangen. Der Embryo läßt sich im Erwachsenen nicht nachweisen [...]. Es bleibt dabei, daß eine solche Erhaltung aller Vorstufen neben der Endgestaltung nur im Seelischen möglich ist [...].)」³²⁾とフロイトが言うとき、そこには心理のラマルクの形質遺伝という見解が見て取れる。大人の中からはもはや胎児はみつかるはずもないが、心理的な胎児、心理の源初的な光景は大人になっても保存されているというのが、フロイトの説である。フロイトによれば、このような子供時代の特有な心理的発達段階を異常に保持していること、つまりそれに固着していることが神経症の原因なのだ。また、系統発生的に見れば、子供時代とはその種、つまりヒトの祖先の初期段階の反復なのであるから、神経症は祖先的な性癖の表出、つまり「先祖返り」とも解釈されることになる。精神分析とは、神経症患者の幼児期にある抑圧されている原因を再構成し、その残存物を克服するための手段であると考えてよいだろうが、フロイトはそのような治療の手段としての精神分析から、「反復説」を頼りに、人類の原始的な祖先へとまなざしを向け、子供の発達と大人の神経症患者の心理学的分析に基づいて人類の歴史そのものを再構成しようという試みへと移行していく。

有名なシュレーパー症例の報告の最後の二つの文はそのような試みの明確な見取り図を与えてくれる。「夢と神経症においてわれわれは、独特な思考方法や感情生活を伴った子供というものを再発見する。われわれはまたこう付け加えることができる：われわれは子

供とともに、古代研究や民族学がわれわれに開示したような野蛮な、未開の人類を見出すのであると (Im Traume und in der Neurose finden wir das Kind wieder mit den Eigentümlichkeiten seiner Denkweisen und seines Affektlebens. Wir werden ergänzen: auch den wilden, den primitiven Menschen, wie er sich uns im Lichte der Alterswissenschaft und der Völkerforschung zeigt.)³³⁾。ここに現われた「子供」=現代の「未開人」=「人類の原始的祖先」という等号関係こそ、「反復説」の主張するところであった。もっともフロイトは「=大人の神経症患者」という等号を付け足しているのではあるが。

フロイトの確信とはすなわち、個人におけるリビドーの発達史（個体発生）は人類の文明の発達史（系統発生）を要約的に反復するということである。この確信をもってフロイトは論文『トーテムとタブー』の論理を構築している。そもそもこの有名なタイトルを持つ論文の副題が「未開人の精神生活と神経症患者におけるいくつかの一致点について」であったことを想起されたい。フロイトはこの論文でフレーザー（彼がフィールドワークを行わない安楽椅子民族学者であることを知りつつ）を始めとする民族学者によるオーストラリア原住民に関する研究に基づいて、幼児期のナルシズムを擬人化によるアニミズム的思考と、両親への性的愛着、つまりエディプス・コンプレックスを一神教の発達と、そして成長に伴う現実原則の優位を近代の科学時代とそれぞれ並行させ、個人のリビドーのダイナミズムを人類の文明史のいわば縮小コピーとして捉えた。特に子供のエディプス・コンプレックス（これは大人の神経症患者においては幼児性の異常な保持となる）の構造が未開人においてはトーテミズムにそっくりそのまま存在すること指摘する。

少年は最初に愛情の対象として母や姉といった近親者の女性を選ぶという³⁴⁾。このような近親相姦願望は正常な発達においては解消されるが、心的な幼児性に固着する神経症患者の場合、この願望が異常に残存するという。しかしこれは未開人の場合ではまったく正常な行動パターンである、というのがフロイトの主張だ。つまり近親相姦を禁止するタブーが確立されねばならないほど未開人の正常な成人男性には近親相姦願望が強いと言うのだ。文明社会の白人の子供においては一過性の「幼若段階」である近親相姦願望を、未開人の成人は保持しているという構図が「反復説」の応用であることは言を俟たない。

トーテミズムの特徴をフロイトは以下のようにまとめている。「トーテムは最初はただ動物にすぎなかった。その動物が個々の種族の祖先とみなされていた。トーテムは母系にのみ相続された。トーテムを殺すこと（あるいは食べること、これらは未開状態においては同一である）は禁じられていた。同じトーテムに属する者同士の性交渉は禁じられていた (Die Totem waren ursprünglich nur Tiere, sie galten als die Ahnen der einzelnen Stämme. Der Totem vererbte sich nur in weiblicher Linie; es war verboten, den Totem zu töten (oder zu essen, was für primitive Verhältnisse zusammenfällt); es war den Totemgenossen verboten, Sexualverkehr zu pflegen.)³⁵⁾。重要なことは、トーテムである聖獣と氏族とを同一視し、男性には同じトーテム氏族の女性には「決して手を出さない」こと、つまりセックスを禁止する厳しいインツェストタブー（近親相姦の禁止）が課せられることである。

フロイトのシナリオはこうである。人類の古来の社会集団は（ここが根拠に欠ける部分なのだが）男性が支配する家父長制的遊牧集団である。家長たる父親が氏族の女性を独占しているのだが、息子たちはそれに反発し、ついに父親を殺してしまう。しかし息子たちは父親殺しの罪悪感から同族の女性たちとの性交渉を放棄し、殺した父親を神聖視すべき

動物、トーテム獣と同一化する（ただしトーテム祭では一年に一度だけ神聖動物は屠ふられ、賞味されてしまう）。フロイトの最後の著作『人間モーゼと一神教』（1939）でも基本線は変わらない。囚われのユダヤの民に父と慕われ、神聖視されたモーゼは、彼が選んだ民によって殺されるのである。もちろんここには「父親殺し」という「反復説」からは少し軌道の逸れる大きなテーマが混在しているのだが（フロイトは「ドストエフスキーと父親殺し」（1928）でこのテーマを論じている）、ここではこのテーマには深入りしない。

以上、ヘッケルの「反復説」がフロイトの精神分析に与えた甚大な影響を跡づけてきた。つまり「反復説」はフロイトの精神分析の根本的な部分である幼児性欲論（口唇期と肛門期に関する議論）やエディプス・コンプレックス、インツェストタブーなどに多に関与するものであることが明らかになったのだ。

それでは「反復説」そのものはどうなったのであろうか。最後にヘッケルの「反復説」がたどった運命を再びゲールドの研究から抽出して、稿を閉じたい。「反復説」はゲールドによれば、その絶頂期を迎えたのち、衰退し、凋落し、一般化した。先に人種差別の問題に関して触れた「幼形進化」説はもはや無視することも、例外として等閑視することもできないものとなってきたのだ。しかしながら「反復説」が完全に論駁されたわけでもなかった。「あまりに多くの確固たる事例がその期待するところと合致していたからである」³⁶。こうして「反復説」は普遍的に妥当する説としては放棄され、一部のケースのみ当てはまる説として一般化していったのである。

注

- 1) 福元圭太：「一元論の射程—エルンスト・ヘッケルの思想(1)—」言語文化論究 No.13 所収。九州大学言語文化研究院，2000年2月。
- 2) 『ダーウィニズム論集』，八杉龍一編訳，岩波文庫，1994年。
- 3) 原典によるとヘッケルの講演「ダーウィンの進化学説について」のドイツ語表記は前稿で福元があげた „Über die Entwicklungslehre Darwins“ という現代の標準的な正書法にはしたがっておらず，八杉氏の表記通り „Ueber die Entwicklungslehre Darwin's“ であった。しかしこれは本質的な相違ではない。また訳文に関しては訂正すべき点は見当たらなかった。
- 4) 前稿1-3に続く。
- 5) これもヘッケルの表記にしたがうが，今日のドイツ語では Gesamtwissenschaft は m を重ねず，Gesamtwissenschaft と綴るのが正しい。なお，原典は以下のものである。Haeckel, Ernst: *Gesammelte populäre Vorträge aus dem Gebiete der Entwicklungslehre*. Zweites Heft. Verlag von Emil Strauss, Bonn, 1879. S. 97ff.
- 6) Ebd., S. 102.
- 7) Ebd., S. 117. Anm. 7.
- 8) Ebd., S. 107.
- 9) Ebd., S. 110. 強調はヘッケルによる。
- 10) Ebd., S. 110f. 強調はヘッケルによる。

- 11) Ebd., S. 112. 強調はヘッケルによる。
- 12) Ebd., S. 113. 強調はヘッケルによる。
- 13) Ebd., S. 114. この手のスローガンは、例は美しくはないが、トイレにかかっているある種の教訓カレンダーを想起させる。
- 14) Ebd., S. 114. 強調はヘッケルによる。
- 15) Ebd., S. 120. Anm. 24.
- 16) Ebd., S. 120. Anm. 24. 強調はヘッケルによる。
- 17) この警句はショーペンハウアーの次の論文のモットーとして掲げられているが、もともと彼自身の著作 (*Über den Willen in der Natur*) にあるものである。Schopenhauer, Arthur: *Preisschrift über die Grundlage der Moral, nicht gekrönt von der Königlich Dänischen Societät der Wissenschaften, zu Kopenhagen, am 30. Janur 1840*. In: Schopenhauer, Arthur: *Werke in fünf Bänden*, Band III, Haffmans Verlag, Zürich, 1991, S. 459.
- 18) 例えば『ダーウィン以来』、『パンダの親指』、『ニワトリの歯』等。いずれもハヤカワ書房から翻訳が出ている。
- 19) ゲールド：『個体発生と系統発生』（注21参照），641頁。
- 20) 同上書，637頁。
- 21) Gould, Stephen Jay: *Ontogeny and Phylogeny*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1977 (『個体発生と系統発生』仁木帝都・渡部政隆訳，工作舎，1987年，2000年第7版)。
- 22) ゲールドはテニソン，ウィリアム・ブレイク，キップリングを挙げている。またダーウィニズムが英文学に与えた影響を論じたジリアン・ピアの『ダーウィンの衝撃；文学における進化論』もすでに翻訳がある（渡辺ちあき・松井優子訳，工作舎，1998）。
- 23) ゲールド：『個体発生と系統発生』，同上書，634頁。なおネオテニーに関してはこの稿の最後でもう一度言及する。
- 24) 同上書，224頁以下。
- 25) 同上書，225頁。
- 26) ゲーテの形態学とヘッケルに関しては拙稿『一元論の射程』（注1）参照。
- 27) アーサー・リュウイス：『社会進化と生命進化』荒畑寒村訳，改造文庫第1部第77編，改造出版社，昭和5年（1930年），48頁参照。オリジナルの書名，作者名ならびに本文は旧字体で書かれているが，平易に書き改めた。
- 28) 同上書，76頁。
- 29) 同上書，83頁。寒村の名訳はかくの如くである。
- 30) Freud, Sigmund: „Drei Abhandlungen der Sexualtheorie“, 1905, Vorwort zur dritten Auflage, 1914. In: *Sigmund Freud Studienausgabe*, Band V. Sexualleben. S. Fischer Verlag, 1994, S. 44.
- 31) Vgl., Ebd., S. 103. „Organisationen des Sexuallebens, in denen die Genitalzonen noch nicht in ihre vorherrschende Rolle eingetreten sind, wollen wir *prägenitale* heißen. Wir haben bisher zwei derselben kennengelernt, die wie Rückfälle auf frühtierische Zustände anmuten.“（性器領域がまだ支配的な役割を果たすまでになっていない性生活の体制

を、われわれは前性器的体制と呼ぶことにしよう。われわれにはこれまでにそのような体制が二つ（＝口唇期と肛門期；福元）明らかになったのだが、それらはいずれもあたかも初期の動物的な状態への逆戻りを思わせる。）

- 32) Freud, Sigmund: „Das Unbehagen in der Kultur“, 1930. In: *Sigmund Freud Studienausgabe*, Band IX. Fragen der Gesellschaft / Ursprünge der Religion. S. Fischer Verlag, 1994, S. 203.
- 33) Freud, Sigmund: „Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides)“, 1911. In: *Sigmund Freud Studienausgabe*, Band VII. Zwang, Paranoia und Perversion. S. Fischer Verlag, 1994, S. 203.
- 34) いわゆるエディプス・コンプレックスの妥当性に関しては、フロイトの高弟であったユングを始め、多くの論者からさまざまな疑義が提出されているのだが、ここではフロイトの説の妥当性そのものは問題にしない。ただフロイトのこの説を完膚なきまでにこき下ろしたものとして、橋本治の『蓮と刀』（河出文庫他所収）の名を挙げておきたい。第2章「フロイトは“おじさん”だった」は圧巻ではある。しかし橋本の特異な文体と過激な内容、ならびに強引な論理には抵抗を覚える向きもあるかもしれない。万人にはお薦めできない。
- 35) Freud, Sigmund: „Totem und Tabu“, 1912-13. In: *Sigmund Freud Studienausgabe*, Band IX. Fragen der Gesellschaft / Ursprünge der Religion. S. Fischer Verlag, 1994, S. 393. なおフロイトは Totem を男性名詞としているが、辞書でみる限りでは中性名詞である。
- 36) ゲールド：『個体発生と系統発生』，同上書，299頁。

Ontogenese-Phylogeneese-Psychoanalyse

— Zur Philosophie Ernst Haeckels (2) —

In meinem letzten Aufsatz „Die Tragweite des Monismus — Zur Philosophie Ernst Haeckels (1) —“ analysierte ich anhand Ernst Haeckels Vortrag „Ueber die Entwicklungslehre Darwin's [sic!]“ Haeckelschen Variante der Entwicklungslehre Charles Darwins. Dabei erörterte ich auch, welch großen Einfluss die Morphologie Goethes auf die Evolutionstheorie Haeckels ausübte.

In diesem Aufsatz werde ich nun die schwellenüberschreitenden Einflüsse des so genannten „biogenetischen Grundgesetzes“ von Haeckel erforschen.

Haeckel definiert das „biogenetische Grundgesetz“ wie folgt: „Die Keimesgeschichte ist ein Auszug der Stammesgeschichte.“ Was dies bedeutet, formuliert er prägnant mit den Worten: „Die Keimesentwicklung (Onthogenese) ist eine gedrängte und abgekürzte Wiederholung der Stammesentwicklung (Phylogeneese).“ Wie Stephen Jay Gould in seinem umfangreichen Werk *Ontogeny and Phylogeny* darlegt, hat diese „Rekapitulationstheorie“ zwischen Individual- und Stammesentwicklung enormen Einfluss ausgeübt, und zwar vor allem auf (i) die Psychopathologie der „Verbrecher“ von Cesare Lombroso, (ii) den Rassismus im imperialistischen Zeitalter, (iii) die Entwicklungspsychologie der Kinder, besonders die von Jean Piaget, (iv) die Erziehungswissenschaft der „Herbart-Schule“ und (v) die Psychoanalyse Sigmund Freuds.

Dem Letzten gilt unser besonderes Interesse. Im vorliegenden Aufsatz wird anhand einer Analyse der folgenden Abhandlungen Freuds (1. Das Vorwort zur 1914 erschienenen dritten Auflage der „Drei Abhandlungen der Sexualtheorie“ (Erstauflage 1905); 2. die 1911 erschienenen „Psychoanalytischen Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides)“; 3. das 1912-13 erschienene „Totem und Tabu“; und 4. das 1930 erschienene „Unbehagen in der Kultur“) nachgewiesen, dass die wesentlichen Teile der Psychoanalyse Freuds ohne die „Rekapitulationstheorie“ Ernst Haeckels undenkbar gewesen wären.